

# 2019年度「専門特殊研究」研究会一覧

文学学術院

2019年度実施の専門特殊研究会は以下のとおりです。

「科目登録の手引き」も確認してください。

なお、本内容はWebシラバスには掲載されていませんので、ご承知おきください。

## 【専門特殊研究について】

高度な原典購読や資料解読、数理系の問題演習など、少人数による上級者向けの研究会での成果を、学部での履修単位として認定するための科目です。

### <履修について>

- 1科目2単位とし、合計8単位を上限に卒業必要単位に算入されます。
- 年間における登録制限単位数、科目数には算入しません。
- 同一の学期に2研究会（4単位）までの単位認定が可能です。
- 入学後2学期目から卒業見込み学期の前学期まで履修することができます。
- 本研究会は科目登録の結果通知には反映されません。

### <成績について>

- 学期終了後、一定の条件を満たした研究会において、十分な成果を収めた学生についてのみ、単位の認定を行います。
- 評価は次学期の初めに行われ、実際に参加した次の学期の単位となります。
- 合格の場合、成績証明書には、「専門特殊研究（主題・担当教員名） 配当年度 配当学期」と記載します。

★各研究会の内容に関するお問い合わせは、以下の担当教員まで直接お問い合わせください。

（以下、学期・曜日・時限・主題名五十音順）

春学期

火

6時限

実施曜日・時限  
の特記事項

参加可能年次

2年以上

主題

ルイス・フロイス『日本史』をポルトガル語でよむ

担当教員

伊川 健二

## 研究概要

主題に記載の文献を原語（ポルトガル語）で読む。適宜邦訳を併用する。形式は輪読を想定している。必要とされる語学学習経験は「備考」欄のとおりであるが、とくに現時点でポルトガル語学習経験があり、当該期の日本関係史料の原語での研究を希望する学生、もしくは現段階では十分な知識・経験がないが将来的に当該領域の研究を志す学生からの積極的な応募を歓迎する。ポルトガル語の学習経験がない受講者がいる場合は、語学の解説を補助的におこなう。その他、適宜南欧における日本関係史料情報の共有をし、初歩的な補助の機会が少ない当該領域研究の出発点となることを意図している。

## 使用文献

Luís Fróis, Historia de Japam, 5vols., José Wicki ed. (Lisboa: Biblioteca Nacional de Lisboa, 1976-1984)  
ルイス・フロイス(松田毅一,川崎桃太訳)『フロイス日本史』1~12(中央公論社,1977-1980年)

## 活動記録の内容、提出方法

研究会での輪読や発言内容により総合的に評価する。

## 受講者選考方法

受講希望者は、中近世移行期の日本に関する欧文史料(使用文献以外でも構わない)への関心を簡単に述べたメールを、3月31日(日)までに伊川(igawa@waseda.jp)宛にお送りください。

## 備考

語学の知識は、ポルトガル語もしくはスペイン語の現在形の動詞活用を習得し、辞書が引ける程度以上であれば不問とする。専門知識は不問とする。外部の研究者を交えた研究会のなかで実施するが、初歩的な解説をまじえつつ進行するので、気楽に応募して欲しい。

**春学期****木****6時限****実施曜日・時限  
の特記事項****参加可能年次**  
2年以上**主題**  
和歌テキスト原典講読1(新古今研究会)**担当教員**  
兼築 信行**研究概要**

和歌は日本文学、ひいては日本文化を理解するために、必須の要目である。本研究では、参加者と相談のうえ、和歌テキストを選定し、分担・輪講形式で注解を行い、当該テキストの読みを深めることを目的とする。和歌テキストは、歌集・歌合・定数歌など、過去にさまざまなものを取り上げてきたが、2018年度は春・秋学期を通して、『伊勢集』のいわゆる「伊勢日記」の部分を読み切ることができた。参加者は文学部・文化構想学部の学部生を中心に、文学研究科の大学院生また、他大学・他研究科の学生が参加する場合もあり、大学院生の先輩から和歌読解の初歩を学ぶことができるので、和歌に関心のある人であれば、初心者でも心配は要らない。和歌という切り口から、それぞれの研究テーマを深めていくことを目指している。

**使用文献**

相談のうえ決定したテキストを、プリント配布する。

**活動記録の内容、提出方法**

輪講形式で講読する。各回、担当者は発表資料を作成し、参加者から質疑を受け、また参加者で議論を行う。1回以上の発表と、2/3以上の出席が単位認定の要件となる。

**受講者選考方法**

参加希望者は、その理由および和歌への関心について記したメールを担当教員に送ること(knck●waseda.jp…●は@)。追って幹事の学生から連絡する。

**備考****春学期****無****その他****実施曜日・時限  
の特記事項** **受講者と相談して決める****参加可能年次**  
2年以上**主題**  
中国近現代文化の諸問題**担当教員**  
千野 拓政**研究概要**

中国近現代文化に関する諸問題について、参加者が自分でテーマを決めて、研究を進める力を養成することを目的とする。各学生の興味を持つテーマがそれぞれ異なるため、参加者が自分が興味を抱いているテーマについて毎回交代で発表し、全員でそれについて討論することを通して各自のテーマを深めていく方法を取る。発表の際に使用する資料はあらかじめ提示し、参加者全員が目を通してることが前提となる。授業ではその読解、問題点の提示、不明な箇所の確認を行うとともに、発表者のコメントについて討論を行う。そうした作業を通じて、通常の授業では扱えない原文資料の読解、吟味、検討を進める力を養い、学生の研究能力を高めることを目指す。(すでに2012年年度秋期から勉強会の形で毎週実施しているが、学生が継続して実施することを強く希望していること、学年を越えて参加を希望する学生がいること、また学生の準備にかかる負担がかなりあることなどを考え、専門特殊研究として実施することを希望する。)

**使用文献**

一巡目は発表者が毎回準備する。

**活動記録の内容、提出方法**

毎回の発表ならびに学期末の提出してもらう研究活動報告によって評価する

**受講者選考方法**

第1回めの授業で自分の興味のあるテーマとその研究について簡単なプレゼンテーションを行ってもらい、判断する。

**備考**

特に指定していないが、大学院進学を視野に入れている学生の希望によって始まった勉強会がもとになっている。今後も同様の希望を持つ学生が中心となると考えている。中文コースのクォーターかに伴い、学期によって開講時間を変更する可能性がある。

**春学期～秋学期****火****7時限****実施曜日・時限  
の特記事項****参加可能年次**  
2年以上**主題**  
満洲語文献講読**担当教員**  
柳澤 明**研究概要**

清代前期(17～18世紀)において、満洲語は清帝国全体の公用語であり、とくに八旗と内陸アジア地域(東北・モンゴル・チベット等)に関しては、その重要性は漢語よりはるかに高かった。したがって、清代の歴史・文化を多面的に検討していくためには、満洲語の読解力が不可欠といえる。清朝最後の皇帝であった溥儀も、晩年「清史の研究には満洲語が不可欠だが、残念ながら自分は詳しくない」と語っていたという。今年度は、ソロン(索倫)出身の武将で、金川・台湾・チベット等で活躍したハイランチャ(海蘭察)に関する文書史料を講読していく予定。なお、初学者は満洲語の文字・文法等に関する基礎的なレクチャーを受けた後に、講読会に参加することになる。

**使用文献**

『清宮珍藏海蘭察満漢文奏摺匯編』

**活動記録の内容、提出方法**

輪読形式でテキストを読み進めます。15回終了時点で、テキストの転写と和訳(各人の担当部分だけではなく、当該期間に講読したテキスト全体)、およびテキストの内容に関する簡単なレポートを提出してもらいます。

**受講者選考方法**

受講希望者は、4月9日(火)または16日(火)の7時限(19:55～)に、柳澤研究室(39号館4階2415)に来室してください。面談により受講者を選考します。また、柳澤までメール(akiray@waseda.jp)をいただければ、上記以外でも面談時間を設けます。

**備考**

原則として隔週開講とし、通年で計15回行います。火曜7限に設定されていますが、受講者の授業スケジュール等に応じて、曜日・時限を調整することもあります。

**秋学期****火****6時限****実施曜日・時限  
の特記事項****参加可能年次**  
1年以上**主題**  
ルイス・フロイス『日本史』をポルトガル語でよむ**担当教員**  
伊川 健二**研究概要**

主題に記載の文献を原語(ポルトガル語)で読む。適宜邦訳を併用する。形式は輪読を想定している。必要とされる語学学習経験は「備考」欄のとおりであるが、とくに現時点でポルトガル語学習経験があり、当該期の日本関係史料の原語での研究を希望する学生、もしくは現段階では十分な知識・経験がないが将来的に当該領域の研究を志す学生からの積極的な応募を歓迎する。ポルトガル語の学習経験がない受講者がいる場合は、語学の解説を補助的におこなう。その他、適宜南欧における日本関係史料情報の共有をし、初歩的な補助の機会が少ない当該領域研究の出発点となることを意図している。

**使用文献**

Luis Fróis, Historia de Japam, 5vols., José Wicki ed. (Lisboa: Biblioteca Nacional de Lisboa, 1976-1984)  
ルイス・フロイス(松田毅一,川崎桃太訳)『フロイス日本史』1～12(中央公論社、1977-1980年)

**活動記録の内容、提出方法**

研究会での輪読や発言内容により総合的に評価する。

**受講者選考方法**

受講希望者は、中近世移行期の日本に関する欧文史料(使用文献以外でも構わない)への関心を簡単に述べたメールを、9月30日(月)までに伊川(igawa@waseda.jp)宛にお送りください。

**備考**

語学の知識は、ポルトガル語もしくはスペイン語の現在形の動詞活用を習得し、辞書が引ける程度以上であれば不問とする。専門知識は不問とする。外部の研究者を交えた研究会のなかで実施するが、初歩的な解説をまじえつつ進行するので、気楽に応募して欲しい。

**秋学期****木****5時限****実施曜日・時限  
の特記事項****参加可能年次**

1年以上

**主題**

ヒエログリフ資料講読

**担当教員**

近藤 二郎

**研究概要**

古代エジプトで考案・使用されたヒエログリフ(古代エジプト語・聖刻文字)で記された古代エジプトの資料の講読をおこなう研究会である。本研究会では、主にエジプト中王国時代から新王国時代に使用された中エジプト語資料の講読を実施する。講読する資料としては、「ヘテプ・ディ・ネスウト」と呼ばれる定型の供養文をはじめとする中王国時代や新王国時代に繰り返し使用される文例を使用する。供養碑文、墓内碑文、そして木棺や彫像、シャプティ像などに記された文章を取り扱っていく。また、ヒエログリフの碑文中に頻出する神名や地名、個人名などの固有名詞や称号などの語彙の学習にも時間を割く。古代の文字資料を取り扱う際には、翻訳された資料を対象にするのではなく、オリジナルな資料を対象とする姿勢が肝要である。また、学習者のために中エジプト語のワード・プロセッサの使い方も学習していく。

**使用文献**

プリントを配布する。

**活動記録の内容、提出方法**

受講者の輪読方式を採用するため、毎回の予習・復習が義務づけられる。受講者には毎回の学習内容を活動記録として200字以内にまとめるとともに、毎回課題を提出してもらい。評価方法は、出席と活動記録の提出、学習態度などを加味して評価する。

**受講者選考方法**

受講希望者は、事前に受講希望理由を800字以内でまとめて9月25日までに担当者の近藤二郎(jkondo@waseda.jp)にメールで提出すること。受講生へは個別に連絡する。

**備考****秋学期****木****6時限****実施曜日・時限  
の特記事項****参加可能年次**

1年以上

**主題**

和歌テキスト原典講読2(新古今研究会)

**担当教員**

兼築 信行

**研究概要**

和歌は日本文学、ひいては日本文化を理解するために、必須の要目である。本研究では、参加者と相談のうえ、和歌テキストを選定し、分担・輪講形式で注解を行い、当該テキストの読みを深めることを目的とする。和歌テキストは、歌集・歌合・定数歌など、過去にさまざまなものを取り上げてきたが、2018年度は春・秋学期を通して、『伊勢集』のいわゆる「伊勢日記」の部分を読み切ることができた。参加者は文学部・文化構想学部の学部生を中心に、文学研究科の大学院生また、他大学・他研究科の学生が参加する場合もあり、大学院生の先輩から和歌読解の初歩を学ぶことができるので、和歌に関心のある人であれば、初心者でも心配は要らない。和歌という切り口から、それぞれの研究テーマを深めていくことを目指している。

**使用文献**

相談のうえ決定したテキストを、プリント配布する。

**活動記録の内容、提出方法**

輪講形式で講読する。各回、担当者は発表資料を作成し、参加者から質疑を受け、また参加者で議論を行う。1回以上の発表と、2/3以上の出席が単位認定の要件となる。

**受講者選考方法**

参加希望者は、その理由および和歌への関心について記したメールを担当教員に送ること(knck●waseda.jp…●は@)。追って幹事の学生から連絡する。

**備考**

**秋学期****無****その他****実施曜日・時限** 受講者と相談して決める  
**の特記事項****参加可能年次**

2年以上

**主題**

中国近現代文化の諸問題

**担当教員**

千野 拓政

**研究概要**

中国近現代文化に関する諸問題について、参加者が自分でテーマを決めて、研究を進める力を養成することを目的とする。各学生の興味を持つテーマがそれぞれ異なるため、参加者が自分が興味を抱いているテーマについて毎回交代で発表し、全員でそれについて討論することを通して各自のテーマを深めていく方法を取る。発表の際に使用する資料はあらかじめ提示し、参加者全員が目を通してることが前提となる。授業ではその読解、問題点の提示、不明な箇所を確認を行うとともに、発表者のコメントについて討論を行う。そうした作業を通じて、通常の授業では扱えない原文資料の読解、吟味、検討を進める力を養い、学生の研究能力を高めることを目指す。(すでに2012年年度秋期から勉強会の形で毎週実施しているが、学生が継続して実施することを強く希望していること、学年を越えて参加を希望する学生がいること、また学生の準備にかける負担がかなりあることなどを考え、専門特殊研究として実施することを希望する。)

**使用文献**

一巡目は発表者が毎回準備する。

**活動記録の内容、提出方法**

毎回の発表ならびに学期末の提出してもらう研究活動報告によって評価する

**受講者選考方法**

第1回目の授業で自分の興味のあるテーマとその研究について簡単なプレゼンテーションを行ってもらい、判断する。

**備考**

特に指定していないが、大学院進学を視野に入れている学生の希望によって始まった勉強会がもとになっている。今後も同様の希望を持つ学生が中心となると考えている。中文コースのクォーターかに伴い、学期によって開講時間を変更する可能性がある。

**秋学期～春学期****火****7時限****実施曜日・時限**  
**の特記事項****参加可能年次**

1年以上

**主題**

満洲語文献講読

**担当教員**

柳澤 明

**研究概要**

清代前期(17～18世紀)において、満洲語は清帝国全体の公用語であり、とくに八旗と内陸アジア地域(東北・モンゴル・チベット等)に関しては、その重要性は漢語よりはるかに高かった。したがって、清代の歴史・文化を多面的に検討していくためには、満洲語の読解力が不可欠といえる(清朝最後の皇帝であった溥儀も、晩年「清史の研究には満洲語が不可欠だが、残念ながら自分は詳しくない」と語っていたという)。2019年秋学期は、春学期に引き続きハイランチャ(海蘭察)に関する文書資料、2020年春学期は、ジュンガルに関する文書資料を講読していく予定。なお、初学者は満洲語の文字・文法等に関する基礎的なレクチャーを受けた後に、講読会に参加することになる。

**使用文献**2019年秋学期:『清宮珍藏海蘭察満漢文奏摺匯編』  
2020年春学期:『軍機処満文準噶爾使者檔訳編』  
(予定)**活動記録の内容、提出方法**

輪読形式でテキストを読み進めます。15回終了時点で、テキストの転写と和訳(各人の担当部分だけではなく、当該期間に講読したテキスト全体)、およびテキストの内容に関する簡単なレポートを提出してもらいます。

**受講者選考方法**

受講希望者は、10月1日(火)または10月8日(火)の7時限(19:55～)に、柳澤研究室(39号館4階2415)に来室してください。面談により受講者を選考します。また、柳澤までメール(akiray@waseda.jp)をいただければ、上記以外でも面談時間を設けます。

**備考**

原則として隔週開講とし、通年で計15回行います。火曜7限に設定されていますが、受講者の授業スケジュール等に応じて、曜日・時限を調整することもあります。

以上